

## 1章 風呂場でセクハラ、手コキ強要

——ああ、また立ってるわ。

広い風呂。

湯船が真ん中に置かれ、左右や周りに人が立てる構造。

青色の看護師服のなかに結構な大きさの肉プリンを詰め込んだ女、玲子。

ウェーブ気味のボブカットで笑顔がまぶしい。

本来なら。

今は、引きつった笑い。

風呂の介助は普通二人だが、この患者は嫌われており、下っ端の玲子が押し付けられていた。

三〇ほどの若い男。

見た目は普通。

内面は最悪だった。

「看護婦さん、ここ、よろしくね」

笑いながら、自分の一部を指差す。

片足がギプスで固められている。

うさぎ病院第二病棟は、大体日常生活が出来る患者だけがいる。

彼も、転んで足を折っただけの患者で、間もなく退院のはずだ。

全看護師がそれを待っていると玲子は思っていた。

——特に私はね。

初めて風呂に入った時には驚かされた。

その患者、伊藤は肉根が立ったのが恥ずかしいから、そこは洗わないでいいといったのだ。

シャイで好感が持てた。立ったぐらいで看護師が引き下がるわけにもいかない。

大丈夫だといって握り、洗った。

終わったとき、いわれた。

「あんたも好きだね」

背中を舐められたように、ゾツとしたのを覚えている。

今にして思えば、伊藤がそんな一物が立ったぐらいで恥ずかしがるわけがない。

油断させるためにそれらしい顔をして、徐々に距離を詰めようという戦略だったのだ。

今は、もう相当に露骨だった。

もともとちゃんと「看護師」と呼んでいたのが、いつの間にか看護婦になっている。

どこがどうと説明しにくいけど、そこにも玲子は嫌なものを感じる。

というか、セクハラしてくる患者は大体「看護婦」と呼んでくるのだ。

「早くお願いしますよ。ガチガチで苦しいんだ」

「あの……少し押さえられませんか？」

「こんな大きい、握りなれてないって？」

——今までプライベートで握ってきたのよりは確かに大きいわ。

「そういうことじゃなくて……」

「洗ってくれたらすぐに縮むよ、玲子さん美人だし、洗うの上手いから」

笑う。

巨根が揺れる。揺らしている。芯の入ったゴムのおもちゃのようにブルブルと。

下で、弛みきった肉玉が湯に浸かっている。



下で、弛みきった肉玉が湯に浸かっている。

——握り潰したい。

今は、ナノテクで  
一日で肉玉ぐらい治る時代だ。

——アレがプチッと手の中で潰れて、  
中身が袋の中に出たら  
……どんなに楽しいでしょうね。

——握り潰したい。

今は、ナノテクで一日で肉玉ぐらい治る時代だ。

——アレがプチッと手の中で潰れて、中身が袋の中に出たら……どんなに楽しいでしょうね。

もちろん、そんな事は許されることではない。

玉が治るまで何処かに隠すなど不可能なのだ、発覚し、逮捕される。

——大体、セクハラで……治るとはいえ玉潰しは……

ひどいのではないか。

玲子自身はついていないとはいえ、恐ろしい。

泡をつけ、洗い始める。

頭を洗い、肩、腹、上から順番に。

手が、止まる。

彼氏のより巨大な肉根。

大きいのがいいなどと欠片も思っていない。

だが、伊藤や彼氏は思っているのだろうとなんとなく思う。

——彼氏に悪いわ……

なんとなく、そんな気がする。

それでも、肉根を握る。

熱い。

レンジで熱したバナナでも握っているようだった。それもかなり大きいものを。

できるだけ手早く終わりたい。

だが、さっさとすると文句を言い出すのだ。

先っぽを掌で包んで素早く洗い、茎を握って手を上下する。

「おおっ、手コキ上手い……」

「そういうのやめてください」

「ああ、悪い。でも、形は同じだよな」

大体そうだ。

だが、意識させられたくない。

いやいやでも、仕事でも、そういうことを実際自分の手でしていると体の奥が熱くなる。

それがまた、玲子にとっては嫌悪感を覚える。

嫌で仕方ない。

先輩たちが「ちょっと用事」でこの場を離れ、終わった頃に戻るのも理解できる。

こんなことをしたがる女がいるわけがない。

まともな患者なら、喜んでもらえて嬉しい仕事だ。

だが伊藤のような不良患者相手だとただ苦痛なだけ。

「おほっ、玉の裏まで……」

持ち上げ、裏まで指を入れて擦る。

手袋越しでも、グニャグニャした妙な感触が伝わる。

全身が大体硬いか引き締まっている男の体の中で、そこだけかなり異質な感触だ。

肉玉を手の中にいれ、優しく指で擦る。

デコピンでも仰け反るという絶対急所。

——ああ、このキ〇タマ潰したい。

ぐ、と指で押す。

「あっ、つ、強い」

「あ、ごめんなさい」

肉玉を放す。

膨れっ面の伊藤。

「気をつけてよ、そこは弱いつて知ってるでしょ？」

「すいません」

頭を下げる。

「まあ、謝るなら誠意みせてよね」

顔を上げて、伊藤を見る。

歯を見せて笑っていた。

「ね、わかるでしょ？」

「はあ……」

「キ〇タマ潰されかけたっていつちゃうよ？」

唇を噛む玲子。

腹は立つ。

だが一面、嘘ではないとわかっている。

伊藤は嘘の言いがかりのつもりだが、玲子は潰そうと思っていた。

と言っても、実際に潰しにいく力の数分の一ではあった。

だが本当に僅かながら、このまま潰してしまおうかと思ったことは思ったのだ。

——ああ、嫌だ嫌だ。

まだギンギンの一物を握る。

何だかんだいって、大体毎回こうなる。

「服着られるようにしますね」

「ん、頼むよ。やっぱり玲子さんは最高だね。ああっ」

洗うのではなく、男を喜ばせる動き。

親指と人差し指でリングを作り、ほかの指を広げてできるだけ長く上下出来るようにする。

——やっと本気になったか。もう観念して毎回さっさと抜いてくれりゃいいのに。

思いつつ、身を任せる伊藤。

やはりセクハラはたまらない。

恋人に何かさせるより、関係ない他人に無理やりやらせている状態が支配欲を満たしてくれる。

シュ、シュと一物が鳴る。

空いた手が下に伸び、肉玉を握り、刺激する。

——この子の彼氏、金貢め好きなんだな。へへへ、他人の女にやらせると、こういう事考えられて楽しいんだよな。それに、俺のはデカイから……

彼氏のより大きいものを握らせている状況に興奮する。

彼氏のを握ったとき、玲子が頭のどこかで伊藤のものより小さいとチラッとでも考える所を想像するだけでさらに硬くなる。

楽しみたいが、そんなに長く風呂にも入ってられない。

ある程度の所で気持ちよく出さなければ、中断しかねない。

玲子にぶち込み、彼氏のより大きいといわせる所を想像する。

肉玉を中心とした下半身から何かが上がってくる感覚。

息が荒くなる。

熱い息を吐き、手コキをする玲子の青色の服の下の肉プリンを凝視する。

服に包まれても、手の上下運動のせいで微妙に揺れている。

挟んで欲しいが、それは流石にまだ要求できない。

とりあえず、手コキ玉揉みだけで満足すべき状況だ。

揉む手に力が入る。

軽い苦痛、すぐに弛む。

いい揉み方だ。彼氏がよほどそれが好きで、毎回させているのではないかと思う。

快感がゾワゾワと全身で高まり、肉根に一点集中してくる。

唇を噛み、一瞬天井を見上げる伊藤。

「ううっ、も、もうすぐ行くから」

「はい……」

機械的な返事。

それほど嫌なのか。

なのに、手コキをさせている。

相手を言いなりにしているいい気分。

「で、でるっ」

仰け反る。

バシヤ、と浅い風呂の湯が跳ねる。

湯より熱そうな粘液が噴出す。

それを手で被って受け止め、しばらく溜めて外に出す玲子。

——汚いわ。お湯は換えるとはいえ……

とにかく、細かい作業に集中する。

それで、嫌な現実から目をそらすしかない。

とにかく出してしまえば、伊藤は満足なのだ。

風呂を終え、松葉杖をついて部屋に向かう。

途中で、二人の友人と出会う。

セクハラ三人衆と呼ばれ、看護師らに嫌われ抜いている三人組。

「よう。また玲子さんにサービスしてもらっちゃった」

「上手くやったな」

一人が笑う。

もう一人は、浮かない顔だった。

「お前も抜いてもらえよ」

そもそも、そういうのを教えてくれたのはその浮かない男だった。

目をそらす。

「い、いや、俺はいい」

ここ数日、そんな感じでセクハラも止めていた。

さっさと立ち去っていく。

「なにかあったのか？」

「伊藤こそ知らないか？」

知らない。

数日前、熱を出して急に寝込んでから、そうなったということしか。

と、友人が黙り込む。

「どうした？」

「いや……この前あいつ、面会謝絶だったよな」

「そうだけど、一日だろ？」

「いきなり面会謝絶の状態になって、一日で終わるか？」

いわれてみれば、不自然だ。

だが、不自然だから何だというのか。

急に寝込んだ以外にどういう解釈があるのか。

「一日、って言うのがな。引っかかるんだ。治るまでの時間じゃないか？」

「治るまでの時間だろ？」

「病気じゃなくて、怪我だ」

声を潜める。

「玉が治るまでの時間だったんじゃないか？」

「なんだって？ じゃあれか、あいつはセクハラしまくったから、看護師に玉潰されて……」

「治るまでどっかに隠されて証拠が消えてから、外に出された」

玉が縮む。ついさっき巨乳看護師に揉ませていい感じに弛んでいたものが。

「セクハラで玉潰しなんて無茶苦茶だ。あるわけねえ」

というより、あつてはならないと伊藤は思う。

「あるわけない、とまでは思わないな。今は治るんだから」

「治るからって……」

「相手は女だ。男ならキ〇タマの大事さはわかってるが、女は所詮その辺はわからない。だから今は「治るんならいいだろう」って、相当玉潰しへのハードルが下がって、普通の女でもちょっとした理由でできるんじゃないかと睨んでる」

唾を飲む。

だとすれば、自分も今危なかったのか。

いや、ありえない。

妄想が過ぎる。

と、そこでふと、疑問に思った。

「お前、怪我なんだっけ？」

「俺も足折ってんだよ」

骨折で入院。

それはごく普通だ。

だが、「今はナノテクが発展し、怪我を短期間で治せる」のではなかったのか。

「玉が一日で治るのに俺たちは何で骨折で入院してるんだ？」

一瞬黙り込む友人。

と、頷く。

「骨は構造上ナノテクで治しにくいんだよ」

「そうなのか？」

「そうでないとおかしいだろ？」

「そうだな……」

まあ、入院のおかげでセクハラも出来る、突っ込んで文句を言うほどでもないだろう。

それは、どうでもいいことだ。

問題は、「セクハラ＝金潰し」の過激な制裁が裏で行われていないかという疑惑だ。

もしそうなら、セクハラなどやってられない。

が、嘘ならどうか。

「そうだ。セクハラを止めさせるために、誰かが噂を流したんじゃない？」

「おいおい、看護師がそんな噂流すか？」

「俺らのセクハラライフに嫉妬してる患者の誰かだよ」

それはありうると思う。

男ならセクハラがしたくないわけがないのだ。

だが誰でもやれるわけではない。

そこそこ親しいような、そうでないような微妙な距離感を作り出し、決定的な決裂に至らないように上手くやる人間関係構築力が必要だ。

そういうのがないものが裏で噂を流すことはありうるだろう。

そう気づくと、伊藤の心は一瞬で軽くなった。

「そうだ、そうに違いない」

「そうだな、その方が自然だよな」

友人もうなづく。

そして、二人で部屋に向かう。

安心した伊藤だが、その考えは無茶苦茶といえる。

セクハラ＝金潰しの図式は噂ではなく友人が思いついた話だ。

仮に噂だったとしても、別の友人が急にセクハラをやめたのはなぜなのか説明がつかないのではないだろうか。

だがもう、伊藤はすっかり疑問を忘れ、次のセクハラチャンスが来るのを待ち望むだけだった。

体験版終わり

楽しんでいただけましたか？

続きは更なるセクハラと7000文字ほどの濃厚セックス、そして止めの玉潰しとなります。

よろしければ製品版で続きをどうぞ。